

# 【第16章】 始皇帝・子嬰君の遺跡、そして福山拉麺

1996年10月

青島・煙台・贛榆・連雲港  
秦山島・臨沂・徐州・上海



秦山島の奇観



## この旅の三つの目的

一九九五年九月に出版された、宮城谷昌光の『孟嘗君』がベストセラーになった。私も読んだが、いくら「鶏鳴狗盗」の故事で知られているとはいえ、見慣れない地名、人名、さらには難しい漢字と熟語が多用されているのが本が、ベストセラーになるとは意外であった。孟嘗君は、戦国時代・齊の人であるので、山東省中国国際旅行社に孟嘗君関係の遺跡があるかどうか調べてもらった。すると、孟嘗君の薛国は現在の滕州で、そこに薛国故城の遺址と孟嘗君の墓があることがわかった。そこで、孟嘗君にちなんだコースを今年の二月から企画して参加者を募集したところ、驚くべきことに、六〇〇名もの集客があったのである。ところが、私自身はまだ孟嘗君の故地へ行ったことがないのが気になっていた。

また、もう一つ気になっていたのは、NHKテレビで放送された、「秦始皇帝」に出てきた秦山島の風景である。この島は山東省と江蘇省との省境にあり、徐福の子孫がいると話題になった贛榆村の沿海にある島で、潮が引くと島と大陸が陸続きとなり、しかもその道は秦始皇帝が造った道だといわれている。その潮が引いたときの映像の印象が強烈で、いつかは行ってみようと思っていた。

さらに、煙台近くの福山も気になる所だ。福山は拉麺発祥の地といわれ、とくに明代にはこの土地で作られた細い麺が皇帝に献上されたという。麺の細さから「龍の鬚」

かりで、地方独特というものは全くなかった。翌朝、ホテルの近くにあった奥林酒店という食堂で「清水麺」を食べる。スープとゆでた麺が別々に運ばれてきた。スープの中には、肉・卵・青菜が入っているが、味づけは薄い。また、別に「醬菜」(醤油漬けの漬物)が運ばれてくる。中に醬菜を入れて味をつける、という麺だった。

青島から煙台のちょうど中間ぐらいの所に、萊陽という町があり、この季節、萊陽名産の梨を道ばたで売っている。試食をしてみたい客が多いため、いつもこういう所では率先して試食するのに、買うことはまったくしない者がいる。同行者の一人、北京の康戦義である。



清水麺(青島)  
麺とタレが別々になって出てくる。その麺のことを清水麺という。つけ麺である

清水麺のタレ(青島)

福山拉麺(刀切龍鬚麺、煙台・福山)  
福山拉麺といわれて行ったが、拉麺でなく刀切麺であった。白く、刀切龍鬚麺。名前を聞いて納得してしまったが、福山拉麺ではない。麺は陽春麺(具に何も入っていない)



福山拉麺を切る



萊陽の梨売り

のことし」とお褒めの言葉をいただき、それから「龍鬚麺」と名づけられたといわれている、と本で読んだことがある。

一九九六年一〇月、これら三つのものをこの目で確かめるべく、山東省へ向かった。

### 拉麺発祥の地・福山へ

上海経由の飛行機で青島に入る。青島は経済的開発が盛んで、郊外にもどんどん発展していつている。新しいホテルも郊外に建っているが、町に麵を食べに行くのに便利なお店、旧市街の中にあるホテルを予約しておいた。最初の麵食いに、まずは食堂が多いという瀋陽街へ行く。ところがメニューは「肉絲麵」「牛肉拉麺」「刀削麵」「炸醬麵」と、どこにでもあるようなものば



青島

それからしばらく走り、東は煙台の半島度假村に着いた。日本のヘルスセンターのような所である。ここに、以前私の会社が日本に招待したことのある旧知の元牡丹江の旅行社の邱魏がいるので、わざわざここを昼食の場として手配したようだったが、私の目的は「福山拉麺を食べることである。断固として中には入らないことにした。同行者たちは最初のうち、「今ももう福山拉麺を作る店はない」「これは嘘である」と主張していたが、私が言う事を聞かないので、福山華僑飯店に行くことになった。青島側は、「ここで作るのが福山拉麺だ」と言う。作るところを見せてもらうことにした。麵生地を薄く伸ばして折りたたみ、端を切り落とし、ねぎを切るように包丁で切っていく。非常に細かく切る技術はたいしたものだと思ったが、これでは拉麺ではなく、切麺である。名前を聞くと、「刀切龍鬚麺」という。私が説明したとき、龍鬚麺の発祥の地を強調し過ぎたのかもしれない。このとき、「福山拉麺とはこういうものか」と納得してしまったのは私の知識不足であった。

あとでいろいろ調べてみると、全く違うもので、このとき食べたのはどうやら「陽春麺」のようであった。みんなは私が麵を食べるのを見ていただけで、正式な昼食はやはり、半島度假村へ戻ってからとることになっていた。

ここではかなり気を遣って、いろいろな麵を出してくれた。まず、煙台の「紅薯麵」。この麵は、一九九三年に煙台で食べられな



紅薯麵(煙台)  
またの名を地瓜麵といい、さつまいもの粉を使った麵。味はあまりうまくない



南方腰帶麵(煙台)  
腰帶麵は西安付近の特産。麵の幅が広い。醬をかけて食べる。西安のものとは違った食べ方なので南方を冠せたのか



麻糖龍鬚麵(煙台)  
福山が龍鬚麵発生の地といわれる。これは刀切でなくて本物。油であげたもので、砂糖入りのごま味噌をつけて食べる。お菓子のようである



紅麵を作る振節床



紅麵擦尖(日照)  
紅麵は高粱を原料とする。粘りが少ないため振節床(またの名を擦尖)を使ってこすりつけて麵にする。卵を加えたルーをかけて食べる



連雲港花果山水簾洞



小刀麵(連雲港)  
作り方は福山と同じ切種である。麵の味は良いが、上の青硬菜が苦くて食べられなかった



掛麵(秦山島の船)  
船の中の麵。乾麵をゆでて卵を入れたのだが、腹がすいていたので、けっこう食べられた



瑯琊台の始皇帝と徐福

私は、張心梅と度假村の責任者と一緒に半島度假村のカラオケで歌を歌って、みんながマッサージを終えるのを待っていた。あとで考えると、福山にいて福山拉麵を食べなかったのだから、何をしに行ったのか全く意味のない煙台行きであった。

### 陸と海と空をつなぐ、秦山島の「神路」

翌日は膠州湾をフェリーで渡って黄島へと行き、まずは始皇帝の巡幸で名高い瑯琊台を目指す。フェリーはわずかに三〇分強で黄島に到着する。瑯琊台の一番高い所に、秦始皇帝が不老長寿の仙薬のある蓬萊へ行くようにと、徐福に命じている像が建てられている。これはまあいいとして、軍隊のリーダーが、歴史遺跡の雰囲気をおち壊していた。ここに秦の始皇帝は三カ月滞在したというが、確かにここから見る海の景色はすばらしい。以前は、二世皇帝・胡亥が造らせたという、いわゆる瑯琊刻石がここに残っていた。だが現在は北京の歴史博物館にあり、ここに現物は無い。

山の中腹には、徐福廟を建設中であった。徐福の出身地は、瑯琊台から南へほぼ一七〇キロほど離れた輪榆だといわれている。今まで彼の出身地については諸説あった。この輪榆には徐阜村という所があり、徐福の子孫と名乗る人が現れ、にわかには脚光を浴びたところである。今、輪榆には堂々たる徐福像が建ち、徐福祠がある。考えようによっては、皇帝を再三だました、いわば詐欺師が祀られていることになる。中国で

帝が造った道、神路を見るには、必ず干潮時間にあわせねばならない。時間待ちのため連雲港で、唯一の観光スポットである花果山に行く。江蘇省・淮安出身の呉承恩は、『西遊記』を書くとき、この花果山をモデルにしたといわれている。中には水簾洞もあり、海に近く、あまり高い山ではないのに深山幽谷を思わせる所である。

秦山島まで行く船は「江蘇遊〇一号」とい、我々一行六名と船員の家族の貸し切りである。出港は一〇時四五分、乗船後約二時間で到着予定なので、昼食は船の中である。大きな鍋で「掛麵」をゆでて、卵を入れただけの簡素な麵であったが、腹がすいていたおかげで、けっこう食べられた。一二時五〇分、秦山島着。大きな船は、干潮のため陸地に近づけず、上陸するには小船に乗り換えなければならない。小船を待って上陸するのに、さらに二五分。上陸して前方左を眺め、「あっ！」と声をあげる。「神路」が沖まで延々と続いており、先の方はかすんで見えない。話によると、陸地まで二〇キロに渡ってつながっているという。一度歩いてみたいが、歩いているうちに潮が満ちてきてしまったら、どうしたらいいのだろうか。もっとよく見るために、高台に登る。そこで、一人の日本人と出会う。何をしている人かと尋ねると、海苔の養殖の指導をしているという。そういえば、秦山島の周囲では海苔の養殖が盛んだ。指導して収穫したものは日本へ持ち込まれ、日本の海苔となるのだそうだ。

また、このあたりには、蟹とさざえが多

麵の老舗、老半齋



薛国故城址



辣醬麵と上海老半齋の麵  
 この麵はすべて澆頭麵である。スープに特徴があり、雪菜を細かく切ってすべてスープに混ぜている。辣醬のタレをかけた麵はこの店の代表的麵である



清水麵のタレ (徐州)



秦荘の屋台

清水麵(徐州)  
 四つスープ、タレを別々に持ってきて、自分の好みにより麵を合わせる。雪菜麵のスープ、牛肉麵のスープ、肉絲麵のスープ、炸醬麵のタレである。この食べ方は初めてである。曲阜の串子麵は2種類であったので、この変型かもしれない



砂鍋麵(雜麵、秦荘)



銀雀山漢墓竹簡博物館

く、干潮になると手でも捕ることができ、船員の家族達は、これを捕りに来ていたのだ。そのために出港が二〇分ほど遅れてしまった。  
 それにしても、この景色は確かにすごい。神路が陸と海と空をつないでいるように感じられ、この世のものとは思えない。小船に乗り換えるとき結構危ないので今は問題があるが、いつか、日本人観光団にも見せたい景色である。

### 孟嘗君の墓をめざって

陸に戻って江蘇省・連雲港から再び山東

省臨沂へ向かう。臨沂は、銀雀山金雀山漢墓群で有名な所である。一九七二年、この漢墓から多くの竹簡が発見され、その中に「孫子兵法」と「孫臏兵法」の二種類の兵法があったという。今まで孫子といわれてきた人物が一人ではなく二人であったことがそれにより判明した、重要な発掘であった。今は博物館になっている。また、ここには王羲之の故居があるが、なぜか名勝辞典にも旅遊図冊にも載っていない。

臨沂から滕州へ行く途中、糞荘で少し休憩をとる。そこに屋台があり、煎餅と「砂鍋麵」を作っており、いい匂いがしている。客も多いので間違いない。前餅の中は、らとキャベツ、はるさめが入っており、時間も一時頃で、ちょうど腹が減っている頃であったので非常にうまい。山東省は煎餅や点心類がうまいと聞いていたが、確かにそのようである。砂鍋麵は、緑豆粉と小麦粉の雑麵であった。普通、雑麵はあまりうまいのだが、薄味の多い山東省の麵にしては珍しく味が濃厚で、これはうまい方の部類に入れてもよいだろう。

この日は、徐州から夜行列車に乗るので、乗り遅れないようによく時間を考えて行動しなければならなかった。なのに、車が滕州に近づいてから、めざす孟嘗君の墓の場所を聞くが誰も知らない。行ったことがあ、地元山東省の張心梅も、逆の道来たため、よくわからないという。道路が混雑して車が動けなくなったところで、みんな降りて、それぞれが周囲の人達に道を尋

ねた。すると、張曉平が聞いた相手が、方向だけは知っていた。さらに、「どのぐらいい時間で行けるのか」と聞くと、「馬上就到(すぐだよ)」との答えである。車が動けないので、私と張曉平は二人で歩こうということになり、歩き出した方がいいが、目的地が全く見えてこない。車は動いていないため、引き返すわけにもいかない。さらに歩くと、ようやく故城の城壁らしきものが見えてきた。歩き出してなんと五〇分である。中国では、五〇分でも「馬上(すぐ)」なので、これ以降、中国人の「すぐ」は信用しないことにした。

孟嘗君の墓に到着する頃、車も動けるようになり、結局時間的にはほとんど変わらなかった。孟嘗君の墓と、その父・田嬰の墓は、ここを管理している人が個人で検証して墓碑を建てたらしい。墓碑はまだ新しい。墓を管理している人は、私が日本人だと知って、「今年は大くさんの日本人がここに来たよ」と話してくれた。なんの変哲もない墓ではあるが、このおかげで日本の旅行社が儲かったのだから、この管理人に感謝の気持ちを込めて、心づけを渡してきた。

徐州には、若干予定より遅れて到着したものの、三〇分ほどだが急いで「漢墓」を見る時間はあった。一九九五年六月、山東省の曲阜で「串子麵」という麵を見つけた。この主人に聞いたところ、この麵は曲阜の麵ではなく、徐州の麵だと言われたので、ぜひ徐州でこの麵を食べたいと思った。そこで徐州の人に探してもらったが、どうしても見つからない。麵が得意だとい



孟嘗君田文の墓(滕州)